

## 屋内祭祀の舞台(2) —ムラの中の祭壇付住居—

石坂俊郎

本誌前号では、弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡に見出される砂・粘質土・小砂利から成る「祭壇状遺構」について、構造の記述を念頭に実態の描写に努めた。

今回は、実態描写の続きとして、それに伴う遺物の状況を確認し、次いで「祭壇状遺構」(以下「祭壇」)を伴う住居の遺跡における状況から、当時のムラにおけるあり方について考えてみたい。

なお記述は、前号に掲げた「『祭壇状遺構』一覧」に基づくが、紙数の都合上その再掲は見送った。不便については、ご容赦いただきたい。

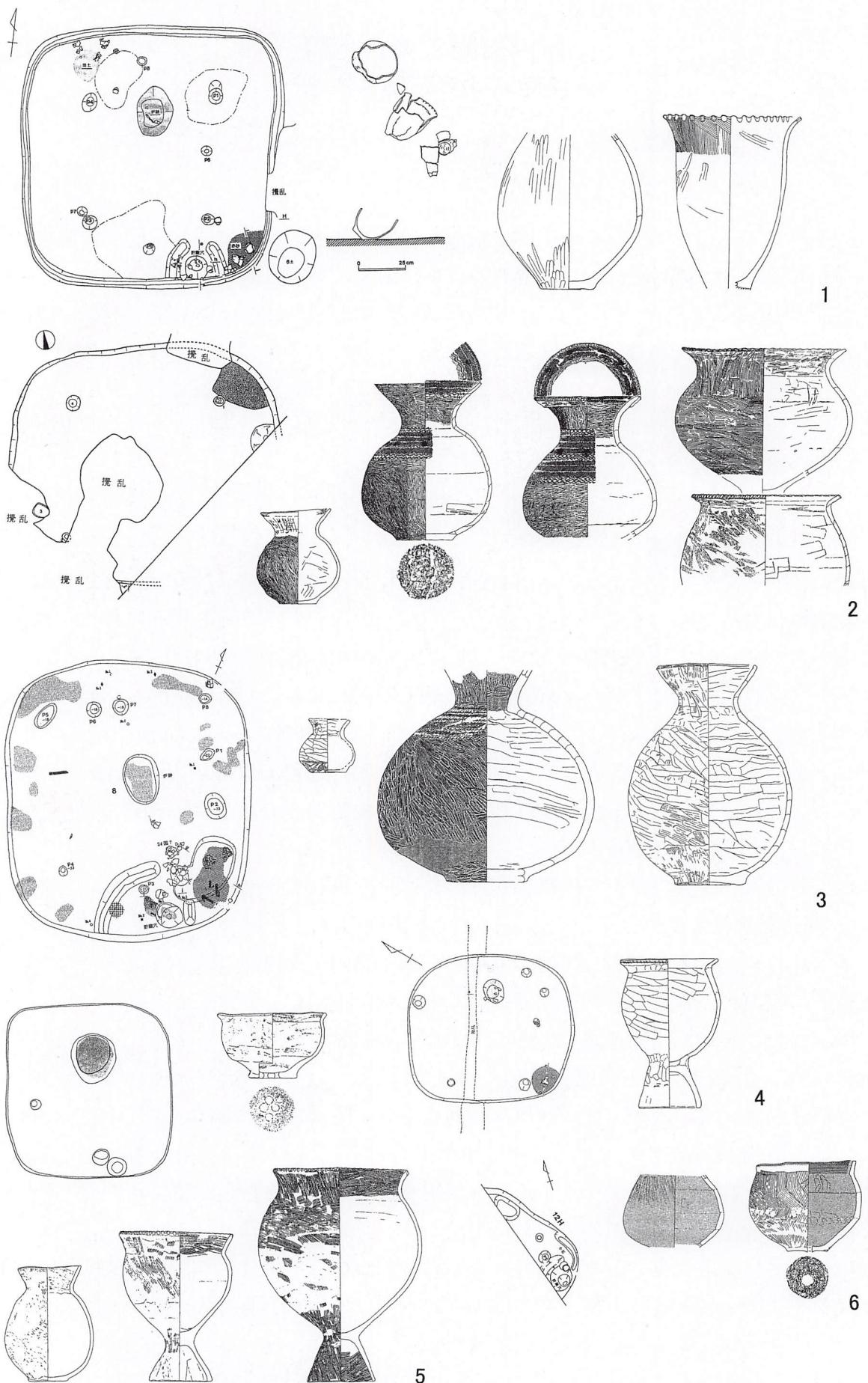
### 1 祭壇状遺構と遺物

祭壇に伴い見出される遺物は、完形状態、破片になって集中的に散乱、あるいは構造材とともに遺構に混ぜ込まれるなど、その状況は一様ではない。それぞれ祭祀に伴う結果を伝えているのだろう。遺構数234件<sup>(1)</sup>のうち1割程度にその可能性が認められる。

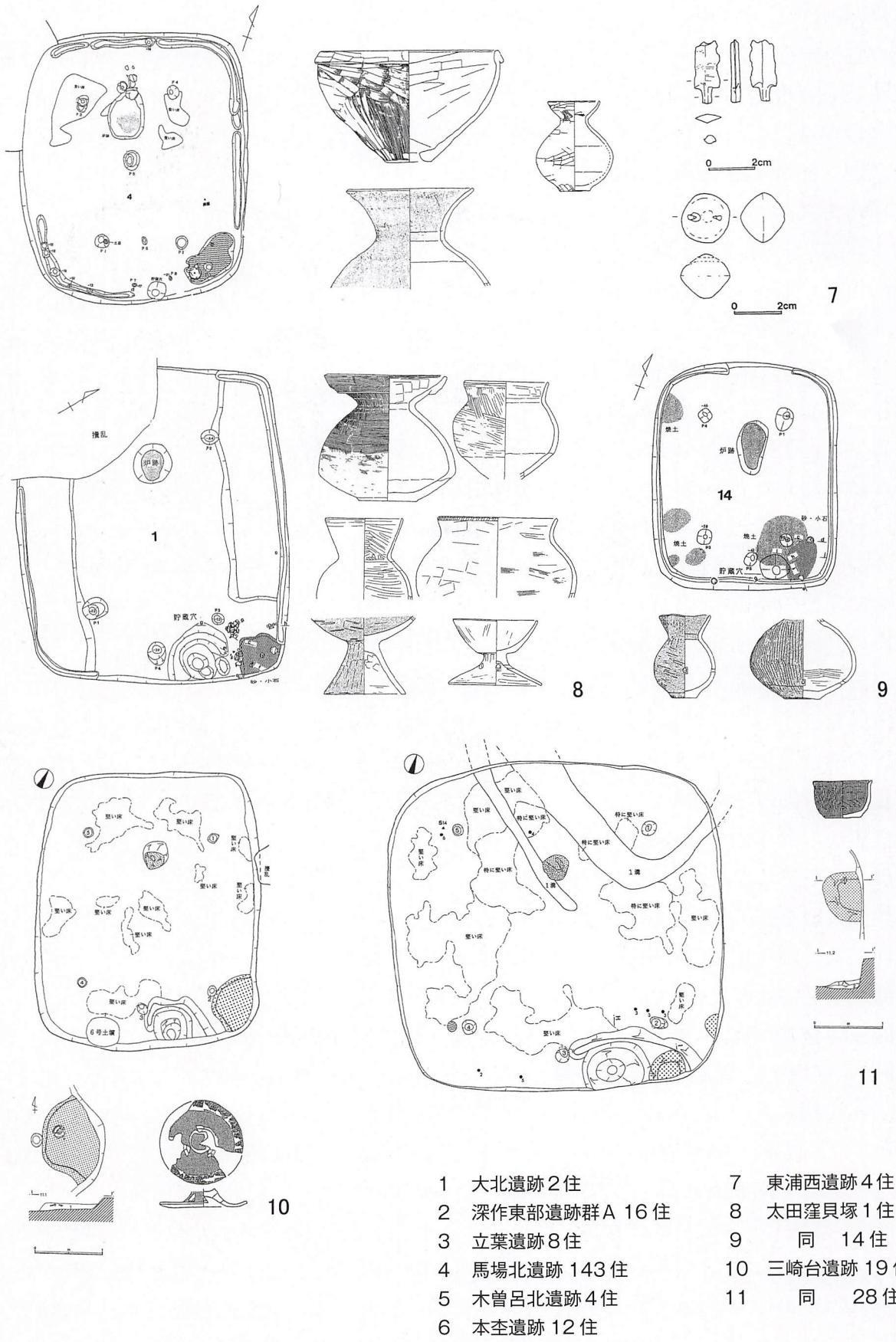
中期宮ノ台式期では、さいたま市大北遺跡2住で壺と甕各1(第1図1)、同市大和田本村北遺跡10住では壺頸部が輪台状になって出土している。前者の壺には砂が詰められており、後者は台として二次利用されたように見える。いずれも祭祀でのあり方をうかがわせる。砂の充填は、後述するとおり土器に小砂利を入れる祭祀行為との共通性が認められ、それらが目下の祭壇出現期に遡り確認される。

後期以降では、さいたま市深作東部遺跡群Aブロック16住で壺2・小型壺1・甕2(第1図2)、同市立葉遺跡8住で壺2・小型壺1(同図3)があり、ともにほぼ同大の壺が対になり、小型壺が伴う。小型壺の存在は他例でも認められる。同市太田窪貝塚14住(第2図9)では、2個体とも胴部に小孔をもち、祭祀用特有とみられる小型穿孔壺の姿である。

一方、さいたま市馬場北遺跡143住は、台付甕である(第1図4)。ほかに北宿遺跡76住、大谷場小池下遺跡12住、上野田西台遺跡18住(以上、いずれもさいたま市)などがあり、標本の母数は限られているが、比較的出現頻度が高い。形式の基本サイズが器高30cm程度であるのに対し20cm以下のものが多く、その中でさらに20cm前後と10～15cm程度の2者に分かれるようだ。これら3者を大・中・小に分類すれば、川口市木曾呂北遺跡4住(同図5)、八王子市神谷原遺跡124住(SB124)(第4図)では大・中がセットで出土している。上野田西台遺跡例では小に顯著な煤の付着が報告されており、小型品でも火にかけて一煮沸具(=鍋)の基本スタイルで一使用された例となる。一方、大でありながら被熱痕が認められない、あるいは赤彩された例もある。このように煮沸形態土器の甕は、サイズ、装い、そして使用法を異にして祭祀にかかわったとみられる。墳墓出土の供献土器群にも甕はしばしば存在するが、それが鍋として用いられていたとしても、そのことから日常用具の偶然的混入と即断するの



第1図 祭壇付住居と遺物 (1) 縮尺 遺構1:120 遺物1:8



第2図 祭壇付住居と遺物 (2) 縮尺 遺構1:120 遺物1:8

は危険だろう。

また煮沸形態土器では、これに甌も加わる。木曾呂北遺跡4住(第1図5)、さいたま市本塙遺跡12住(同図6)、同市東浦西遺跡4住(第2図7)で出土している。柿沼幹夫の仕事以来、とりわけ埼玉県と周辺で見つかる当該期の甌については、そのたびに氏の論考に照らして注意が促されてきた(柿沼1976、1984)。柿沼は、和泉式期前半以前の甌を、「『まつり』に関係した非日常的な容器」ととらえつつ、出土例にもとづき壺上半を転用した器台+平底甌+甌の3点からなる「甌セット」モデルを提示し(同1976<sup>(2)</sup>)、前稿での住居内エリアC(第3図)との密接な関連を指摘した(同1984)。本塙遺跡12住の壺胴部は、「甌セット」の片割だろ<sup>(3)</sup>う。その甌は、内面に赤彩、外面にもその痕跡が認められ、全面赤彩の可能性が指摘されている。内部に祭壇構造材でもある小砂利と貝巣穴跡泥岩<sup>(4)</sup>が少量入れられており、セット全体の赤い装いとともに祭祀の姿を如実に伝えている。

県内の諸例とともに、神谷原遺跡では質・量ともに突出した事例が見出される。古式土師器編年研究

上有力資料として注目されてきた124住(SB124)出土土器群である(第4図<sup>(5)</sup>)。これらは焼失住居の遺留品として、屋内での使用状況を良好に留めていることが期待できる。廃絶後の投げ込みとされる3点を除くと点数は28点、うち3点は石器、土器は25点である。これらは、出土位置から大きく4群にまとめられる。

1群：エリアCの祭壇とその付近の群

2群：入口を挟み1群と向き合うエリアEの群

3群：入口から見て炉辺奥にあたるエリアA・Hの群

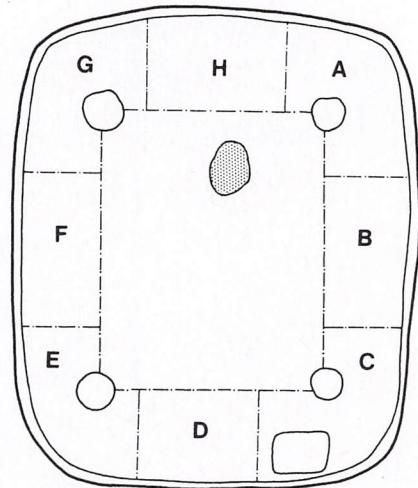
4群：主柱穴に囲まれた住居中央エリアに散在する群

量的主体を成すのは1群で、内訳は以下のように3群に細分できる。

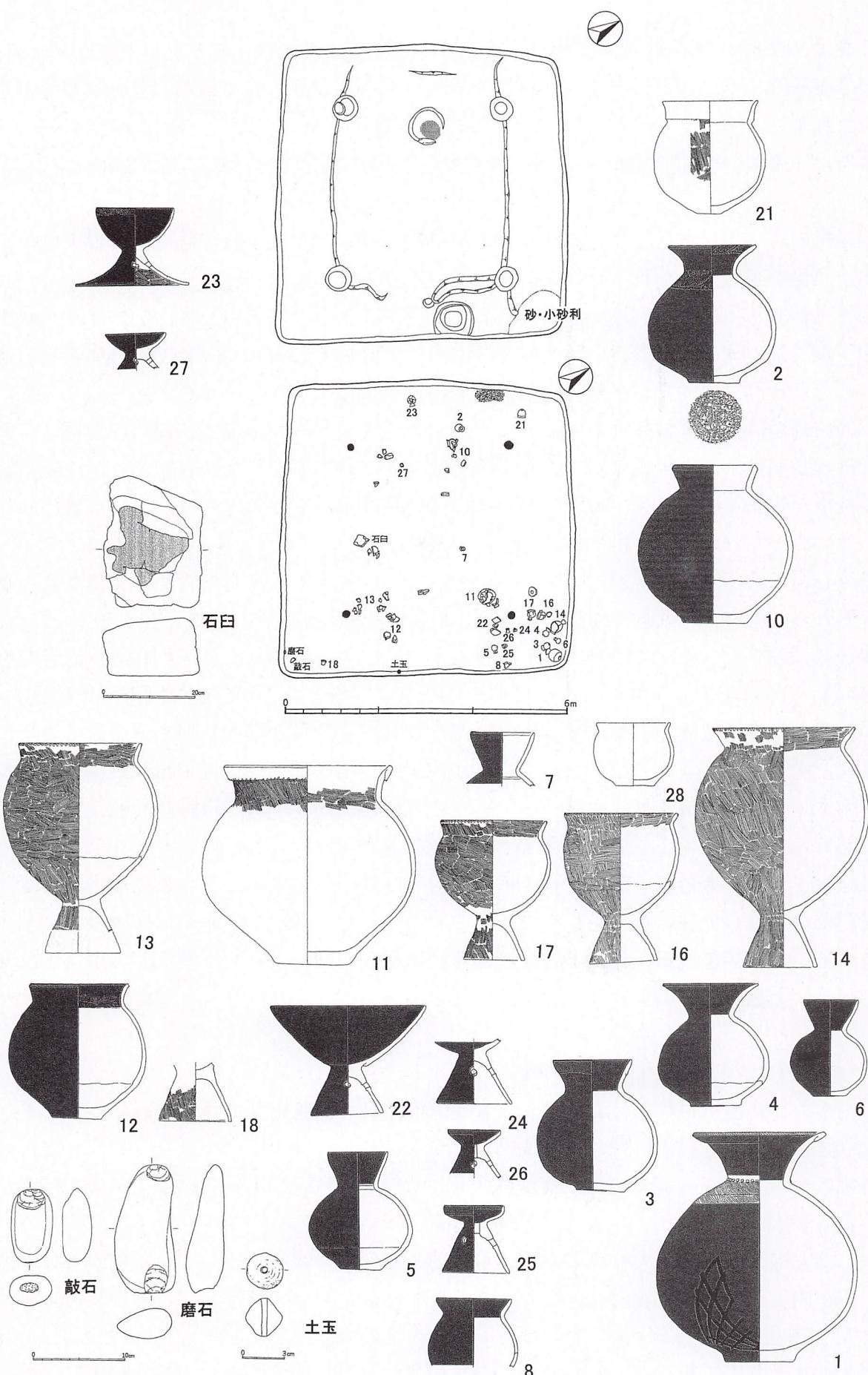
1a群：祭壇上に遺留する。最奥部である住居コーナーに縄文装飾の折返口縁壺(1)、その周囲に中型の折返口縁壺(3)と単純口縁壺(4・6)がある。6には炭化米が遺存し、供物の内容が知られる注目の出土例である。それに関連するが、同遺跡103住では、本例とほぼ同大の二重口縁壺に小砂利が詰められていたという<sup>(6)</sup>。

1b群：祭壇と貯蔵穴に挟まれ、中央エリアとは貯蔵穴に付随する土堤によって隔てられた位置にあたる。単純口縁壺(5)、広口短頸壺(8)、器台(25、26)、高杯(22、24)がある。

1c群：祭壇の住居奥側、壁に沿うベッド状遺構上にあたる。大型台付甌(14)、同中型(16、17)である<sup>(7)</sup>。これら1群の直近には、4群に含まれる大型の折返口縁広口短頸壺(11)がある。



第3図 住居内区分図(2)  
(小倉1990)



第4図 神谷原遺跡 SB124 と遺物 縮尺 遺構 1:120 遺物 1:8

2群は、内寄りに中型の広口短頸壺(12)と台付甕(13)、壁際に土玉と石器2点などがある。小型品が壁際に拠る状況は、周壁外縁に収納スペースが設けられていたことを示しているのかもしれない。

3群は、中型の単純口縁壺(2)、同広口短頸壺(10)に小型高杯(23)、北陸系甕(21)などである。

炉辺奥のエリアH付近では、炉辺とともにしばしば土器が置かれているが、外来色の比較的強い土器が祭壇から離れてそこにある状況は注意を引く。

さて主体である1群は、赤彩された貯蔵・供膳形態土器群に煮沸形態土器が伴う、基本三形態フル装備の構成である。祭祀との親縁性を示す前2者が「赤の演出」でまとめられるとともに、それとは対照的ながら台付甕の位置づけもここに示されている観がある。4・6の中型単純口縁壺は、墳墓供献も含め祭祀に活躍する形式であり、器高18cm前後の規格は、畿内第V様式長頸壺系譜の単純口縁壺、東海系ヒサゴ壺に共通する。米の容器とされたのも、型式の性格を物語っている。一方、群の中核に伝統色の強い壺が置かれている点も特徴的である。

先述した県内諸例では、これに匹敵する規模のものは、存在の痕跡を含めて見出されなかつた。それらの場合、印象論を恐れず言えば、神谷原遺跡124住型のグランドスタイルに対し、一部ごとに独立して祭祀のセットが形成されていたのではないか、と思われる。器台や有稜高杯のように、もとより弥生土器には求められない器種もあるが、その段階で比較しても、さいたま市三崎台遺跡で小型高杯(出土は脚部のみ)や小型椀が祭壇に埋め込まれるように設置された例が示すように(第2図10・11)、小型土器がセットの核に用いられる、大型土器中心のスタイルとは別個の様式が確立していたのではないか。小型の台付甕や甕についてもそれに関わる可能性があるだろう。ところで神谷原遺跡124住に甕は無い。そもそも神谷原集落に甕はまれで、報告例は破片からの推定を含め2点にとどまる。それを以て古墳時代前期の祭祀における甕の存在意義を軽視するものではないが、祭壇の祭祀には複数のスタイルがあり、そこに集落の規模、地域の習慣、あるいは集団に共有された伝統などの事情が反映されているかと思われる。

## 2 ムラの中の祭壇付住居

屋内から外に視点を移し、ムラにおける祭壇付住居の展開を見ていきたい。

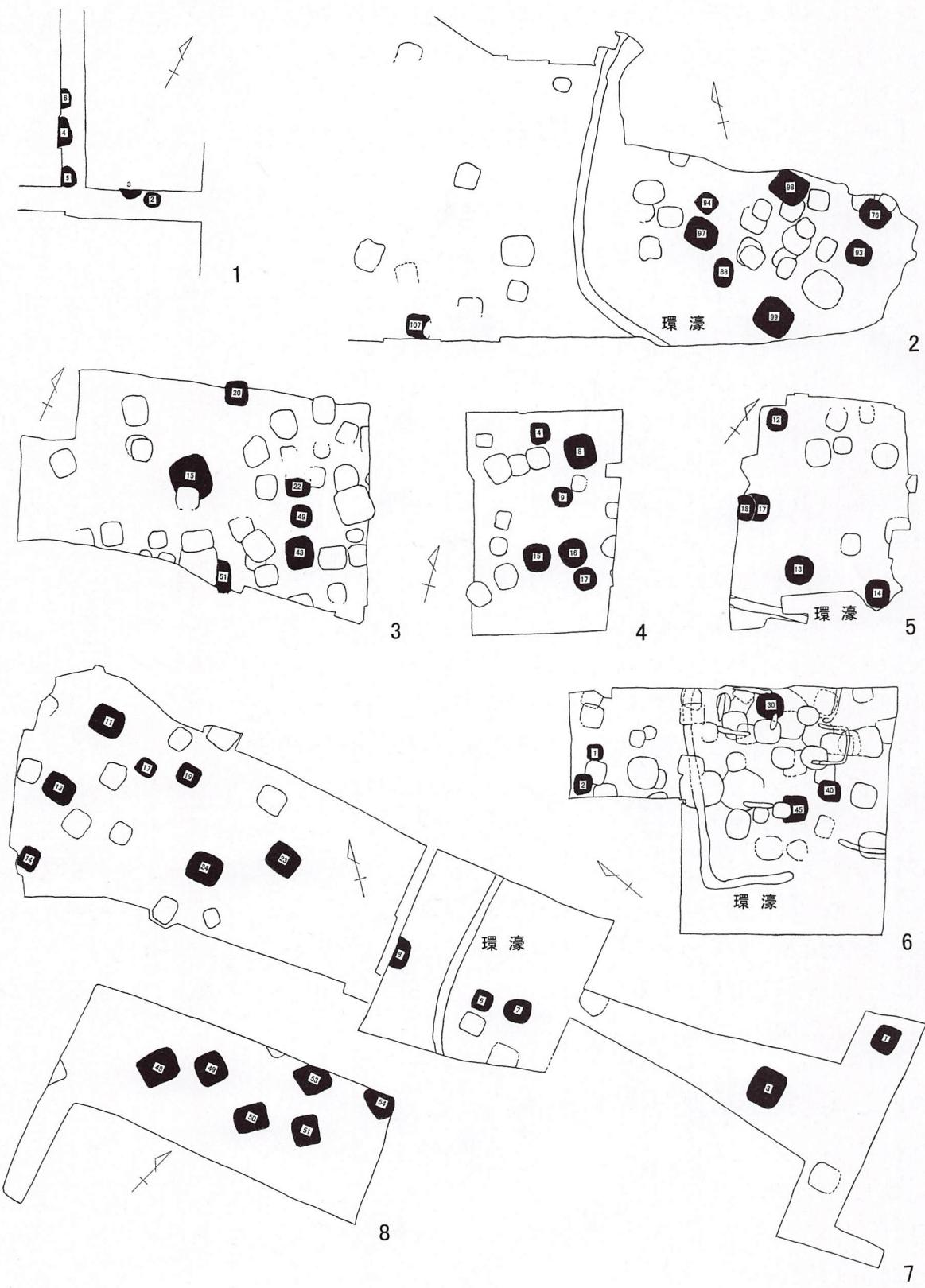
### (1)あり方の特徴

発掘された諸例を通観すると、集落跡における祭壇付住居のあり方には、以下の特徴がうかがえる(第5～7図)。

1：調査範囲が集落跡の一部であっても、その範囲内に複数出土している例が多い。同一遺跡内における出現頻度は比較的高く、希少な存在とは言い難い。

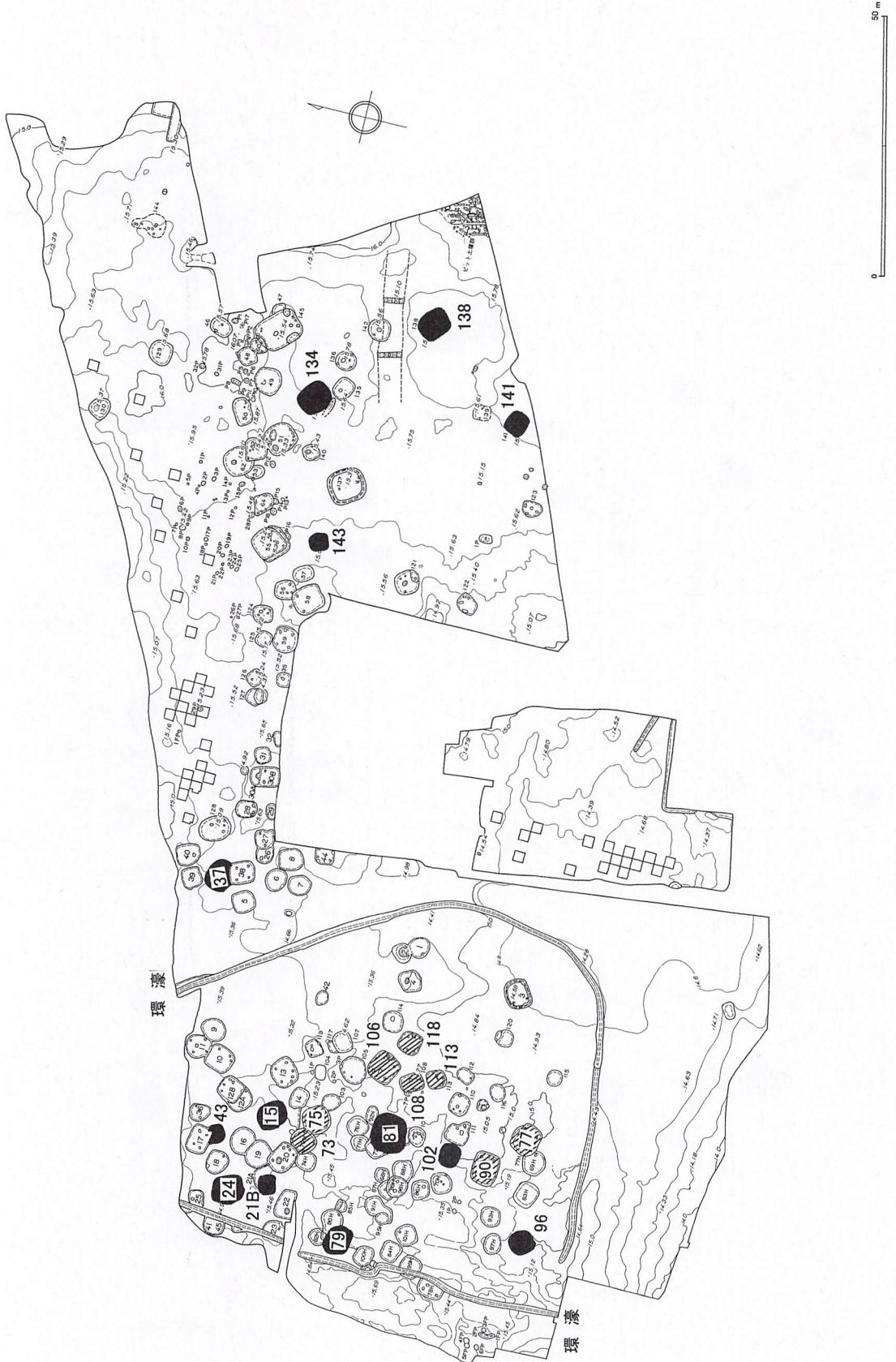
2：1軒の平面規模は、画一的ではなく大小のばらつきが認められる<sup>(8)</sup>。

3：偏在するより散在的に分布する。ただし相互の重複例は少なく、偶然的より、むしろまま規律的な配置を思わせる例もある。



- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1 大北遺跡 (6次)  | 5 大谷場小池下遺跡   |
| 2 北宿遺跡 (17次) | 6 土屋下遺跡      |
| 3 日向北遺跡 (4次) | 7 A-61号遺跡    |
| 4 立葉遺跡 (2次)  | 8 稲荷台遺跡 (B区) |

第5図 祭壇付住居の分布 (1) 縮尺 1:600



第6図 馬場北遺跡の祭壇付住居分布 縮尺 1：1200（報告書付図にもとづき作成）

まず特徴1から見て、祭壇付住居は、集落で单一の祭祀施設として存在していたのではなかったように見える。大型住居であればムラの会堂、小型住居であれば祠堂のようなムラの紐帶を担う一極的な性格の施設は想定できない<sup>(9)</sup>。

## (2) 遺構規模からみた傾向

特徴2のとおり祭壇付住居には大小があるが、各遺跡の例を見渡すと、そこで検出された遺構のうち最大規模のものは該当している場合が多い、という点は注意される。北宿遺跡99住(第5図2)、さいたま市日向北遺跡15住(同図3)、同市A-61号遺跡3住(同図7)がある。端的な例では、馬場北遺跡の環濠内81住が該当する(第6図)。環濠内の中央に位置し、環濠外集落を含めても最大の住居である。保存部分を除いて全面を調査した神谷原遺跡の186住も同様である(第7図)。

一方、小型住居では、さいたま市土屋下遺跡1・2住のように床面積10m<sup>2</sup>に満たない極小の部類に属するものがあるが、この例では炉と柱穴を持っており、それを欠く小型住居特有の特徴は認められない。総じて見ると、小型住居と祭壇との親縁性は、大型住居に比べ薄い傾向がうかがえる。

## (3) 分布の型と単位集団

特徴3の状況を編年的に読み解く作業は、単位集団に対応する住居群を見出す目標に直結するが、当然それが祭壇付住居の分布に対応する保証はない。筆者も単位集団に対応する住居群を「単位住居群」として、小笠原好彦の仕事(小笠原1989)を手本に把握を試みたことがある(石坂1993・1999)。上野田西台遺跡の弥生時代後期集落を事例として得たモデルは、4軒ほどの住居が幅30~40mの三日月(緩い弧)状に配列されるものだった。

まず実態に応じて祭壇付住居の分布状況を整理すると以下のようだ。

①調査区において祭壇付住居が大部分を占める。無論それが集落全体の状況とは保証されない[大北遺跡(第5図1)、上尾市稻荷台遺跡(同図8)]

②祭壇付住居と無祭壇(とみられる)住居が混在する。ただし両者の併存が想定可能な、概ね均質な密度で分布する[大谷場小池下遺跡(第5図5)、A-61号遺跡、神谷原遺跡(第7図)]

③②同様、祭壇付住居と無祭壇住居が混在するが、無祭壇住居は高密度に分布し、相互に重複する[北宿遺跡環濠内、日向北遺跡]

③としたとおり祭壇付住居どうしが重複する事例は、目下のところごくまれである。

①の状況は、祭壇付住居を主体とする単位住居群が、集落の少なくとも一角を占めていたことを示す。大北遺跡例によりそれは祭壇付住居の出現期に遡り認められ、稻荷台遺跡例により古墳時代前期まで存在したことがうかがえる。

祭壇付住居と無祭壇住居が混在する②では、両者が共存する単位住居群(②-a)と両者それぞれから成る単位住居群(②-b)の二者が想定できよう。そしてそれらが共存したか、あるいは先行する住居群の痕跡が意識される近時差で重複を避けて連続的に交代した結果といえる。A-61号遺跡では、祭壇付住居の規模差に注目すれば②-bが見え、また相対的に大型住居が祭壇付住居の十分条件であり、それが集落展開の枢軸を成すかのように南北に連な

る点を重視すれば、それを含む②-aの複合にも見える。可能性の羅列はここまでにするが、③の状況に②-b同様に祭壇付住居群③-bを仮想した場合、北宿遺跡環濠内集落の環状配列、日向北遺跡の大型住居を中心とした弧状配列、大谷場小池下遺跡のほぼ等間隔の弧状配列は、偶然の産物とは見做し難い。規模は突出するが、馬場北遺跡環濠内集落では、最大の81住を中央に環濠の南北にわたる70m近い弧状配列(北から43・15・81・102・96住)が認められる<sup>(10)</sup>。これらを単位住居群と即断することは控えるが、単位住居群を把握する手掛かりは期待してよいだろう。

#### (4) 神谷原遺跡の場合

神谷原遺跡は、169軒の堅穴住居のうち55軒、およそ三分の一が祭壇付住居という注目すべき状況にある。

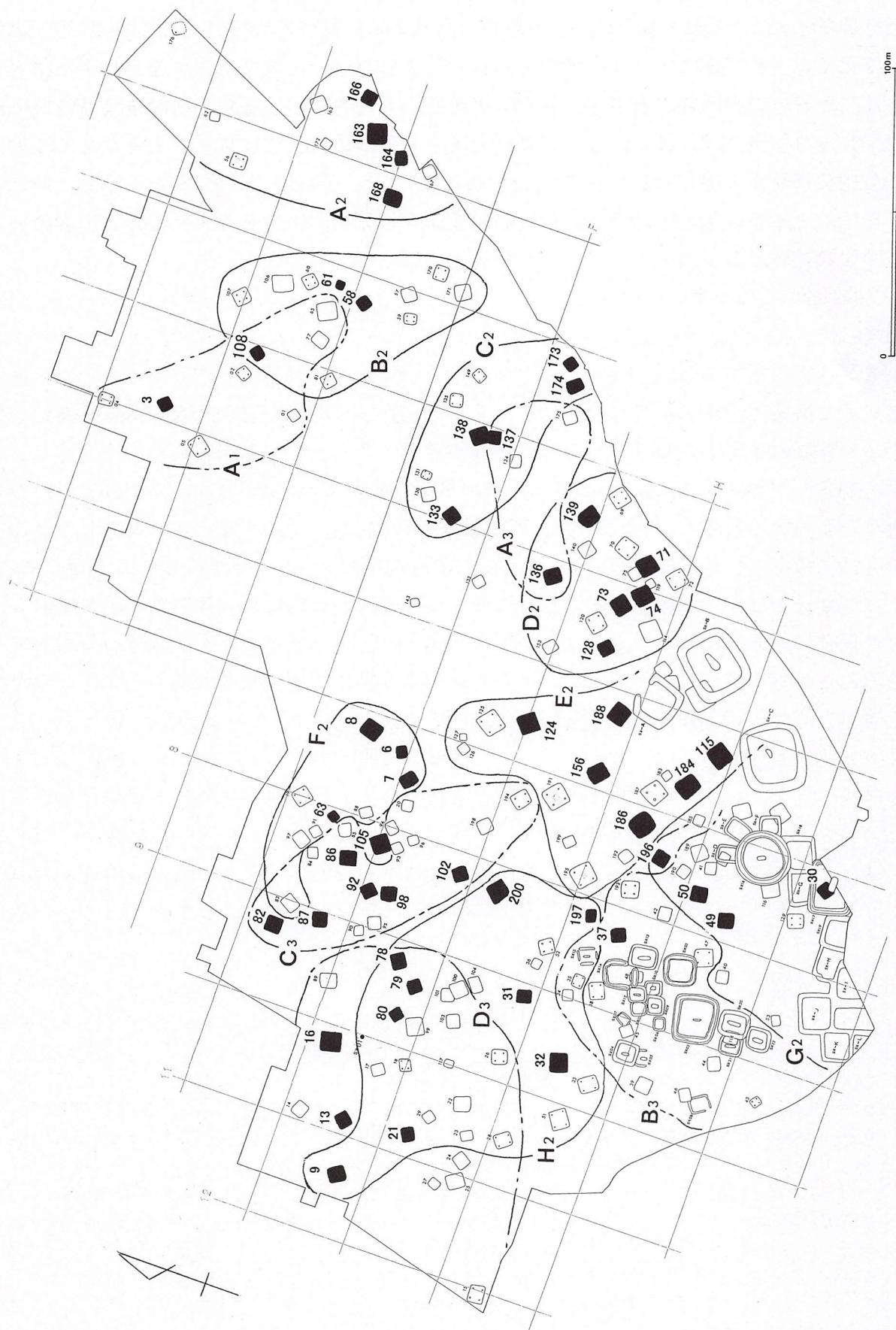
報文では、集落の存続期間は神谷原I～III期に細分される。I期集落は、調査区の北端部にあって6軒の住居からなる(第7図、小住居址群A1)。II期ではそれが96軒と爆発的に増え、神谷原集落の盛期として、調査区全体に展開する。6群に細分される(同A2～F2)。III期は、縮小傾向を示し、40余軒が主に調査区南半に拠る。4群に分けられる(A3～D3)。

祭壇付住居をこれらの群に当てはめると、I期では1軒、II期では各群に3～7軒、III期では2～6軒となる。各群に対応して分布していると言える(表1)。II期では、各群中で相対的に規模の大きい大～中型住居に偏るのに比べ、同III期では住居の規模に縮小傾向が認められることもあるが、20m<sup>2</sup>台の中型に目立つ。小型住居には通時的に少ないようだ。このうちII期E2群では、15軒のうち10軒が大型・準大型住居、残る5軒は小型住居という二極分離の様相を呈し、祭壇付住居6軒は、すべて前者に属している。このような状況は、当該期の神谷原集落におけるE2群とそれに伴う祭壇付住居の位置づけを物語る現象として注目したい。つまり、E2群の祭壇付住居が、群内にとどまらず集落の中核的性格を帯びていたのではないか。E2群の分布域は、次期のIII期では空白域と化す。神谷原集落の消長の中で同期は縮小段階とされており、その内で集落構造に起きたラディカルな変動の一端がうかがえる<sup>(11)</sup>。

以上、祭壇付住居の分布状況と単位集団のあり方に相関を見出そうと試みた。可能性の見本市の観を呈する結果であったが、そこに手掛けたりとなる事象は確認できたと考える。だが単位集団の姿について仮想に実を求めるようすれば、土器編年をはじめいくつもの視点で臨まねばさらに先

時期区分	群	遺構名(SB)				群	遺構名(SB)							
神谷原I期	A1	3				-								
神谷原II期	A2	163	164	166	168	B2	58	61	108					
	C2	133	138	173	174	D2	71	73	74	128	139			
	E2	115	124	156	184	186	188	F2	6	7	8	105		
	G2	30	50	196				H2	9	21	31	32	80	197
神谷原III期	A3	136	137			B3	37	49						
	C3	82	87	86	92	98	102	D3	13	16	78	79		
不明	63													

表1 神谷原遺跡祭壇付住居群別一覧



第7図 神谷原遺跡の小住居址群と祭壇付住居分布 縮尺 1：2000（報告書插図にもとづき作成）

には踏み込めないという、いわば当たり前の現実も再認識させられる。祭壇付住居群が単位住居群に直接的に対応するとすれば、祭壇を戸別で持ちつつ祭祀を共有する単位集団が想定される。それが祭壇を持たない単位住居群と併存したならば、集落内での単位集団の色分けが可能になり、時期差を認めるなら、集落の展開に両者の交代劇が生じたことになる。単位住居群内に祭壇の有無が戸別に共存するならば、単位集団内部における祭壇の意義とそれをめぐる関係を追求するという、いわば常識的な出発点に立ちかえることになる。実態の究明は、今後の道程としてなお丸ごと残されていると言わざるを得ない。

## むすび

前号に続き、居住空間の一隅に付設された祭壇からムラの風景にわたり論述したが、住居内に戻ってもまだ手つかずの課題が残る。まず「貯蔵穴」の再検討と祭壇との関係である。また祭壇の存在が確認されないエリアCも、柿沼が述べるようにそれ自体祭祀の空間としての性格も想定しておくべきである。砂と小砂利の祭壇を用いない祭祀スタイルが別にあった可能性はむしろ高いだろう。そして住居内の他のエリアにも、炉辺やその奥のように土器の抛りつく場所はある。それらを視野に入れ、屋内空間全体のあり方に話題を広げる必要がある。さらに祭祀の空間を追えば、住居廃絶後の覆土中に見出される土器集中、住居外の土壙、そして共同体の紐帶に関わる墳墓周溝や環濠の土器群へと道のりは続く。実務の行程の先にそれを遺した集団の姿が見えてくるか、それを求める目的を失念せず先に進みたい。そして目前の課題として、貯蔵穴を含めた検討を、次回の主題に掲げておく。

## 《註》

(1)前号の一覧に本塗遺跡12号住を加え1例増えた。

(2)柿沼は、次の通り述べている。

「弥生時代後期から古墳時代前期にかけての甑形土器の特色は、次のようにまとめることができよう。

1. 集落跡で、ほぼ1個程度の割合で出土している。
2. 機能・容量から考え、少量蒸す程度のものである。
3. 甑形土器は、竪穴住居内で特殊な扱いをされていた。」

そしてこの3点の特色から、

「集落の共有物として、ないしは集落の支配者の占有物として位置づけられていたのではあるまいか。そして、それは神への御供えのためや、晴れの日の食物の調理用具として「まつり」に関係した非日常的な容器であったと理解したいのである。」(柿沼1976;45頁)としている。

また遺物出土状況にもとづく住居内エリアCへの注目は、本稿にとって先見というべき存在である。

(3)東浦西遺跡4住例も祭壇上から甑と壺上部が出土したと記述されているが、図からすると後者の出土位置は炉の西脇ではないか。祭壇上「甑セット」の状況ではなさそうだ。

(4)貝巣穴跡泥岩は、さいたま市行谷遺跡6住でも祭壇構造材に数点含まれている。神谷原遺跡では、「穿孔貝巣穴痕跡軟質泥岩」として29件の住居からの出土が報告されており、その大部分は祭壇構造材の一部としてである(三辻・井上1981)。点数は1軒あたり1~11点、大きさは最大径38~16mm、多くが被熱により淡赤褐色(2.5Y7/4, 5YR7/6)を呈しているという。同遺跡の報文には、祭壇構造材の色調について言及がないが、淡赤褐色の色調は前号で触れた「赤の演出」に関連して注目されるし、また被熱の事実は小倉の紹介事例に共通する。房総、湘南の海岸地域由来であり、人為的な持ち込みと見做されている。坂本和俊は、古墳時代後期の塩流通を示す遺物として、製塩土器とともに同遺跡を含む関東内陸部の出土例に注目している(坂本2015)。実のところ、これら三辻・井上、坂本の仕事は、

脱稿寸前に熊谷市埋蔵文化財センターブログ『熊谷市文化財日記』の記事「穿孔貝巣穴痕跡軟質泥岩[古墳時代]」を参照して連鎖的に知った。神谷原遺跡の事例は見落としており、また県内古墳時代前期の出土例として東松山市反町遺跡、川島町富田裏遺跡があることは驚きをもって知ったが、両者については内容を確認する間もなかった。被熱の痕跡が、製塩に由来するのか祭壇の赤に関連するのか。ともあれこの岩石が祭壇状遺構に関連する重要な要素であることを再認識させられた次第である。

- (5) 図中の遺物番号は、対照の便を考慮し報告書のそれを踏襲している。一方、遺物図は、出土位置をなるべく反映させて配置した。
- (6) 検出時に床面が確認されておらず、祭壇の有無は不明である。
- (7) 図中17直上に番号のない絵が1点認められるが、消去法的に見て小型広口短頸壺(28)がこれにあたると思われる。
- (8) かつて筆者は、大宮台地地域の当該期集落遺跡を分析するに当たり、竪穴住居跡の床面積について10m<sup>2</sup>単位で区切り、40m<sup>2</sup>以上を「A群」、10m<sup>2</sup>未満を「E群」とする規模に応じたA～E群の5分類を試みたことがある(石坂1993)。本稿で大型住居とはこのA群住居、小型住居とは概ねD・E群(20m<sup>2</sup>未満)住居を指す。20m<sup>2</sup>台は中型、30m<sup>2</sup>台のものは準大型としておく。なお前稿に引き続き「住居」は「建物」と同義で用いており、竪穴遺構を概ね包括している。
- (9) すでに小倉は同様な趣旨を述べている。「神谷原遺跡、馬場北遺跡とともに、中形から大形の住居に集中する傾向がみられるが、小形のものから、大形のものまでにみることができる。(中略) 規模的にやや大形の部類の住居跡に多い傾向がみられるものの、規模的にはあまり関係なく、また集落においても全般的に分布している。つまり集落内において、特別なあり方を示すものではないようである。」(小倉1988)
- (10) 小倉論文で掲げられた分布図では、祭壇付住居として本稿第6図の黒塗住居のほかに73・75・77・90・106・108・113・118住が加わるが、報告書には砂や小砂利について記述がなく、存在が確認できない。第6図では斜線で表示したが、それらを加えた論述はここでは見合させておく。
- (11) 神谷原集落の展開については、本稿の作成過程で分析の重要性を再認識させられた。「祭壇状遺構」を検討する枠組で追求しきれるものではなく、機会をあらためて論じたい。

### 《参考・引用文献》

- 石坂俊郎 1993 「大宮台地の弥生ムラー集落構成と住居形態の素描ー」『史觀』第128冊
- 同 1999 「弥生時代後期の遺構、遺物について」『下野田本村遺跡』埼玉県埋蔵文化財事業団報告書 第255集
- 小笠原好彦 1989 「古墳時代の竪穴住居集落にみる単位集団の移動」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第22集
- 小倉 均 1988 「弥生時代から古墳時代にかけての小礫などが散布する住居跡について」『浦和市史研究』 第3号
- 同 1990 「弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構の研究」『埼玉考古』第27号
- 柿沼幹夫 1976 「甌形土器に関する一考察—南関東地方出土例を中心として—」『埼玉考古』第15号
- 同 1984 「甌に関する覚書」『埼玉県立博物館紀要』第11号
- 坂本和俊 2015 「古墳時代東国の土器を使わない製塩と塩の流通痕跡」『埼玉考古』第52号
- 三辻利一・井上晃夫 1981 「第5章 穿孔貝巣穴痕跡軟質泥岩の遺存体」『神谷原I』所収

### 報告書

前号に掲載した一覧から、本稿に直接関わるもの再掲した。

- 浦和市遺跡調査会報告書 発行 浦和市遺跡調査会  
『北宿・馬場北・馬場東・馬場・小室山遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第24集 1983  
『西谷・和田南・大北・大間木内谷遺跡発掘調査報告書』同第25集 1983  
『馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書』同第50集 1985  
『北宿・馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書』同第62集 1986  
『北宿遺跡発掘調査報告書』同第99集 1988

『本塙遺跡発掘調査報告書(第3地点)』第122集 1989  
『北宿遺跡発掘調査報告書(第17次)』同第151集 1992  
『大北遺跡発掘調査報告書(第6次)』同第156集 1992  
『太田窪貝塚発掘調査報告書』同第255集 1999  
『柄谷遺跡(第7次)・南方上台遺跡(第1次)・行谷遺跡(第2次)発掘調査報告書』第274集 2000  
『東裏西遺跡(第2次)・東浦遺跡(第4次)・下野田稻荷原遺跡(第3次)・大門西裏南遺跡(第2次)発掘調査報告書』同第277集 2000

東部遺跡群発掘調査報告書 発行 浦和市教育委員会・浦和市遺跡調査会  
『馬場北遺跡(第6次) 北宿遺跡(第10次) 松木北遺跡(第3次) 松木遺跡(第5次)』第8集 1987  
『馬場北遺跡(第15次) 松木遺跡(第12次)』第14集 1990

大宮市文化財調査報告 発行 大宮市教育委員会  
『深作東部遺跡群発掘調査報告』大宮市遺跡調査会報告第10集 1984  
『B-92号・A-230号・A-61号遺跡』第20集 1987  
『三崎台遺跡—第3次調査—』同第56集 1996  
『土屋下遺跡』同第47集 1994  
『A-61号遺跡—第2次調査—』同第62集 1998

さいたま市遺跡調査会報告書 発行 さいたま市遺跡調査会  
『大谷場小池下遺跡』第42集 2005  
『立葉遺跡(第2次)』さいたま市遺跡調査会報告書第132集 2015  
『日向北遺跡(第4・5次)』同第160集 2014

川口市遺跡調査会報告 発行 川口市遺跡調査会  
『篠ハツ・木曾呂北・木曾呂』川口市遺跡調査会報告第14集 1991  
『小谷場貝塚』同第40集 2011

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
『稲荷台遺跡』第139集 1994

八王子市柄田遺跡調査会  
『神谷原Ⅰ』 1981  
『神谷原Ⅲ』 1982